

露の見た夢

登場人物

- タジム
（ソマテの盗人）
- カナ
（娘・タジムの仲間）
- シヤツポ
（少年・タジムの仲間）
- コンパーレ
（アスカリナを治めるサラガヤの邦司）
- ハンガス
（千騎長、コンパーレの腹心の部下）
- ラビナス
（サラガヤの高僧）
- メディナ
（コンパーレの娘）
- ラクサーダ
（マサロ人の指導者で英雄）
- モキ
（ラビナスの下僕）
- オルガ
（メディナの端女）
- 僧・ムアテイ
（ラビナスに使える僧）
- 僧・オンドル
（ラビナスに使える僧）
- 僧・ジュテ
（ラビナスに使える僧）
- 転びの女
（サラガヤに忠誠を誓ったマサロ人）
- 転びの男
（サラガヤに忠誠を誓ったマサロ人）
- チャガタイ
（モンゴルの将）
- 兵・パド
（ハンガスの部下）
- 兵・ガモ
（ハンガスの部下）
- 兵・ザッパ
（ハンガスの部下）
- その他
マサロ人・サラガヤ兵、モンゴル兵

第一幕

夜明け前、東方の国サラガヤの領地。マサロ地方の都アスカリナの郊外にある刑場。舞台中央に一段高く、二本の杭が立っている。虐げられた民、マサロ人達が、一人、二人と集まって来る。人々は口々に彼らが救世主と信じる男ラクサーダの名を呼びながら、その姿を求めている。

マサロ人達 ラクサーダ…ラクサーダ…ラクサーダ、

下手奥より、目隠しをされ後ろで縛られたラクサーダ、兵士達に抱えられ登場。民衆の声が一段と高くなる。ラクサーダを神輿のように掲げて練り歩く兵士達、すがろうとするマサロ人達を棍棒で叩き、押しやり、蹴散らす。

兵・パド ええい、どけどけ、

口々にラクサーダの名を呼びながら、ラクサーダに近づき、すがろうとするマサロ人達。

兵・ガモ どけ、

やがて中央の杭の根元にラクサーダを据える。兵士パドとガモがラクサーダを杭に繋ぐ。別の兵士達が寄ってくるマサロ人達を棍棒で叩き、押し戻す。

兵・パド

静まれ、

兵・ガモ

静まれ、静まれ、

兵・パド

マサロ人に告ぐ、本日の処刑は邦司コンパーレ様の命により行われるものである。妨ぐる者はサラガヤの治世に造反する者として何人なりとも厳罰に処すものなり。

兵・ガモ

よつて、この槍六尺の届く内に入りたる者は、命なきものと覚悟せい。

兵・パド

(高笑)よいか、サラガヤの国法はこれを犯す者に容赦ない。不屈きにも自らを世の光と称した男は、刺殺の上更に首を打たれる。

兵・ガモ

ラクサーダの骸は牛馬の糞尿にまみれ恥辱は末代に及ぶのだ。

マサロ人

(叫び)ラクサーダ、

(マサロ人達、ラクサーダの名を口々に唱える)

マサロ人

コンパーレに死を、(兵・ガモに槍の柄で打たれその場に倒れ、他の兵士たちに引き摺られて上手へ消える)

マサロ人(女)

(ラクサーダの元に駆け寄り)マサロの光を消さないでおくれ(すぐに兵士に取り押さえられ、同じように上手に消える)

兵・パド

静まれ、

兵・ガモ

静まれ、

マサロ人

ラクサーダ、

マサロ人

コンパレーに死を、

(マサロ人達、ラクサーダの名を連呼し、兵士達ともみ合う)

マサロ人

我らが光ラクサーダ、マサロの誇りラクサーダ、(声を合わせ繰り返す)

兵・パド

ええい、静まれ静まれ、

兵・ガモ

静まれ(民衆の一人を斬り殺す)貴様らも死にたいか、

瞬時に喧騒が止み、上手一段高く照明に浮かぶラビナスとハンガス。

ラビナス

わざわざマサロ人を煽り立てる事もないでしょうに。

ハンガス

コンパーレ様のご命令です、余興は賑やかにしろと。

ラビナス

慣例では、いかなる罪人も末期の言葉は残せる筈、ラクサーダにもそれは許されるのですか。

ハンガス

例の噂を気にかけておいでですか、馬鹿げた話です。コンパーレ様がそんな事を恐れていらつしやるとでもお思いですか。

ラビナス

そういう意味ではありません。ただ、マサロ人はラクサーダが復活の予言を残すと信じています。たとえ愚かな世迷言でも、災いの種となるかも知れない言葉を残させるのが得策かどうか。

ハンガス

祭司長のお言葉とも思えません。ラクサーダが何か言ったとしても、朽ち果てようとしている偶像に、どんな力があると言うのですか。もし慣例を曲げれば、それこそマサロ人は我々がラクサーダの言葉を恐れたと思うでしょう。

ラビナス

なるほど。

ハンガス

もちろん、処刑される罪人は皆、末期の言葉を残します。

ラビナス、ハンガスの照明が消え、再び民衆と兵士たちの喧騒に戻る。ラクサーダの元に駆け寄ろうとするマサロ人達、追い払おうとする兵士達。下手より、カナとシャツポ登場。

カナ 本当にタジムも首をはねられるのかい。

シャツポ

間違いない、刑場の下役に聞いたんだ。マサロのラクサーダと一緒に殺されるのは三日前に捕まった寺院荒らしの盗人だつて。

カナ

だからあたいはサラガヤの寺を狙うのは反対だつたんだよ。

小競合いを続ける群衆と兵隊達。袋を被せられ、後ろ手に縛られたタジム、兵・ザツパに引っ張られて上手より登場。

タジム

くそ、何すんだよ、放せ、放せよ。俺は何もやっちゃいねえ。ただの参拝客だよ。

兵・ザツパ

黙って歩け、

タジム

な、どこに連れて行くんだ、ここはどこなんだよ。

シャツポ

タジム、タジムだ。

カナ

タジム、(近寄れない)

兵・ザツパ

歩くんだ。(タジムを縛った縄を引っ張る)

タジム

(転ぶ)いて、痛え、何すんだよ。

ラビナス

あの男は、

ハンガス

サラガヤの寺院で捕らえました。供物を盗んだ男です。ラクサーダと一緒に処刑いたします。

ラビナス

なるほど、マサロの英雄は盗人と共に首を打たれる。ラクサーダを辱める舞台の仕上げですか。コンパレ様らしいやり方です。

ハンガス

サラガヤはこの地で未来永劫に渡ってマサロ人を治めるのです。その為には二度とラクサーダのような男が出ないようにしなければなりません。

タジム

俺は何もやっちゃあいねえんだ、どこに連れていくんだよ。くそつ、目隠し取れよ。

シャツポ

タジム、

タジム シヤツポ、シヤツポか、おい、シヤツポ、ここはどこなんだよ。

カナ アスカリナの刑場だよ、

タジム カナ、刑場って、まさか、

兵・ザツパ さつさと歩くんだ。

カナ あんた処刑されちまうんだよ。

タジム 嘘だろ、

シヤツポ タジム見るよ、(タジムの覆いを剥ぎ取る)

兵・ザツパ 貴様ら、何をするか、(剣を抜き、振りかざす)

シヤツポ うあ、(カナと二人で慌てて下手へ)

タジム カナ、シヤツポ、助けてくれよ、(兵・ガモ牽かれ、杭の根元へ)

シヤツポ どうしようもないんだよ、

カナ

タジム、

タジム、杭に縛られラクサーダと並ぶ。やがて、押しやられた群集が遠巻きに見守る中、兵・パドと兵・ガモが杭の根元で槍の刃を研ぎ始める。照明F〇、すすり泣きしているタジムをスポット抜き。

タジム

……しょっぱいたきりろくに調べもしねえで、いきなりこれはねえだろ……くそ、けちな酒樽一つくすねただけじゃねえか。(目の前で槍が勢いよく交差する)ヒッ、おしまいだ、おしまいだ……じきにこの槍が俺のはらわたを貫いて、俺は死んじゃうんだ。(兵士達、再び槍を研ぎ始める)……死ぬっていうのは、どういう事なんだ……死ぬ、死ぬ、俺が死んじゃう。俺がいなくなる……ヒッ、嫌だ、嫌だ、死にたくねえ、俺は死にたくねえ(号泣)、うっ、うっ、

ラクサーダ

泣いているのは、誰ですか。

タジム

ウツ、ウツ、

ラクサーダ

兄弟よ、泣くのはおやめなさい。死は万人に等しく訪れるものです。最期に残された僅かな時間を、悲しみで満たしてはなりません。

タジム

死にたくねえ、死にたくねえ、

ラクサーダ

末期に嘆き悲しむと、彼岸の世でも苦しむといひます。

タジム

ウツ、ウツ、あんだだつて、槍で刺されて、首を打たれるんだ、怖くねえのか。

ラクサーダ

何を恐れる事がありました。この目隠しの向こうにすら、私にははつきりと見えます。一望千里の砂の海が。砂漠の民は砂から生まれ、砂に還るのです。生きとし生ける命は、砂漠の風紋と同じ、現れては消え、消えてはまた現れる。遠い先祖の代からずっと繰り返されてきた命の営みは、絶える事はないのですから。

タジム

砂漠だ、先祖だ、冗談じゃねえ。砂をありがたく思った事なんざ一度だつてねえ。砂漠なんざ、俺の生まれ育ちと同じでくそ忌々しいだけだ。どこまで逃げてても、ついて来やがる。

ラクサーダ

人は、氏素性ではなく、心のありようで幸せになるのです。

タジム

やめてくれよ。聖者か何か知らねえが、こんな時に説教なんか聞きたくねえ。俺達盗人の頭の中は、食う事と逃げる事だけだ。盗まなきゃ食えねえ、食えなきゃ今日にも野垂死にだ。だから盗むんだ。心のあ

りようがさもしいつてか、だけどな、俺は親に仕込まれて盗人になったんだ。氏素性が俺を盗人にしたんだ。それなのに、何で殺されなきゃなんねえんだよ。(激しく泣く)あんた、マサロの神様って言われてんだろ、だったら俺を助けてみるよ。(ひとしきり泣く)

ラクサーダ

もし助かったら、違う生き方が出来ますか。

タジム

…：何だって。

ラクサーダ

あなたが助かるかどうか、やってみましょう。その代わりに、もし生き長らえたら、私の言葉を試してみてください。

タジム

…：試す？

ラクサーダ

心のありようです。私も、出来る限りの事をしてみましょう。

タジム

…：どういう事だよ。

ラクサーダ

サマラ語を知っていますか。

タジム

サマラ語。

ラクサーダ

サラガヤの経典を記した古い言葉です。

タジム

そんなの分かる訳ねえだろ。

ラクサーダ

耳にした事はあるでしょう。サラガヤの寺院で僧侶が祈祷や典礼で祈っているのを。

タジム

何度も聞いたけど、何を言っているのかはまったく分からねえよ。

ラクサーダ

助かりたければ、私の言う通りにするのです。いいですか、（ラクサーダの声、タジムを照らすスポット、F〇）まず、私の言う言葉を覚えてください。罪状が読み上げられて、最期の時がきたら……。

兵・ザツパ

（兵士が罪状を読み上げる言葉、マサロ人のすすり泣き、F I）

神が定め賜うた生まれついでの高賤を否定し、不敬なる行状を重ねたる男、マサロのラクサーダ。かの極悪人はこのアスカリナの都にて、愚かしくも邪悪な思想を流布し民の心を乱さんと画策した。よって刺殺の上首を打たれる。かたやソマテの住人タジム、神聖なるサラガヤの聖殿において供物を盗みしお前の罪は赦し難きものなり。よって、件の愚か者同様、死罪に処す。

兵・ガモ

よいか、耳あるものは聞け。マサロのラクサーダは盗人と並びて刑に

処される。この男は神でもなければ聖者でもない。

兵・パド
サラガヤの治世を揺るがさんと計る者は、何人たりとも赦されざるを
知れ。

兵・ザッパ
ではあるが、慈悲深き邦司コンパーレ様は、罪人どもに末期の言葉を
残す事を許された。刑の執行は、その後となる。(ラクサーダに)手短
にな。

ラクサーダ
(泣いているマサロ人達、やがて静かになり、ラクサーダに注目する)
兄弟たちよ聞きなさい。私が願う事はあなた方がこれからも顔を上げ、
目をしっかりと見開いて歩いて欲しいという事です。蹂躪された国を
恥ずかしく思う事はありません。マサロの民は麗しき民。争いを好ま
ず、隣人の過ちをも赦すことの出来る気高い民なのです。

老人
ラクサーダ、わしらを残していかにしてくれ。

ラクサーダ
私はいつまでもあなた方と共にいます。この身が土に返っても、誇り
高き先祖の英霊と共に、彼らが築いたこのアスカリナの都に留まるの
です。安心なさい、聖者は剣ではなく徳高き言葉によってマサロの民
を束縛の縄目から解き放ちます。約束しましょう。あなた方の光は太

陽です。たとえ、夕べに西の地平に没しても、朝には東の山よりいずるのです。

ざわめくマサロ人達。

マサロ人達 (口々に) 東の山、東の山より、朝には東の山より、

ラビナス 復活の予言、

ハンガス 愚かな繰言です。(立ち上がり) それでは、仕上げと参りますか。(兵士達に合図を送ろうとする)

ラクサーダ さて、祭司長ラビナス、そして千騎長ハンガス、

ハンガス 何のつもりだ、

ラクサーダ 及びサラガヤの隣人達よ、私はあなた方にも別れの言葉を残しましょう。

ハンガス 命乞いなら遅すぎるぞラクサーダ。

ラクサーダ あなた方に残す私の言葉はこうです。マサロのニガヨモギは、サラガ

ヤのキンポウゲを覆い尽くし、やがてその根も葉も枯らしてみせましよう。

ハンガス

キンポウゲ、まさか、

ラビナス

サマラ語のメデイナです、そしてニガヨモギは呪い、

ハンガス

ラクサーダめ、

ラビナス

処刑は中止です。 (ハンガスに)コンパレー様のご指示を仰ぎましよう、

ハンガス

しかし、ここでやめる訳には、

ラビナス

万が一何かあった時に、首が飛ぶのは我々ですぞ、

タジム

キサラ、キサラ、ソイネリヤ、メデイナ、ヨンサーラ、エスケルノ。

(驚いてタジムを見るハンガスとラビナス)

ラビナス

呪いは解けた、

ハンガス 何をしておる、ラクサーダを刺せ、刺し殺せ。

ラクサーダの元に駆け寄る群衆。押し返す兵士達。

ラビナス (叫ぶ) その盗人は殺してはなりません。その盗人は、殺してはなりま

せんぞ。

(暗転)

第二幕

サラガヤの寺院。中央上手寄りに立つラビナス。少し離れて、下手寄りに立っているタジム。その背後にはラビナスに仕えている僧・オンドルと僧・ジユテが立っている。

ラビナス (僧・ジユテに) キエ、ナサラメレサーナ。

僧・ジユテ、机の上にあつた経典を取り、タジムに差し出す。

タジム ……(事態がのみ込めない様子で、不安げに受け取る)

ラビナス (タジムに) イギョンテラ、キエ、セインタレトウワ。エセンデメラ。

タジム ……。

ラビナス

エセンデエメラ……(暫くタジムを見て)なぜ応えない。

タジム

へっ、

ラビナス

あの時お前が引用した言葉を読んでみなさいと言ったのです。その經典に書かれてあるのではないですか。

タジム

あつ、(慌てて經典を開こうとする)

ラビナス

もうよろしい、開いてもどうせ読めないでしょう。(僧・ジユテに)やはり騙りです。

タジム

(僧・ジユテ、タジムから經典を取り、机の上に返す)

タジム

俺はただ、

ラビナス

分かっています。ラクサーダですね。サマラ語は古語です。神学を修めた者か我ら僧侶でもない限り使えません。お前のような下郎にかかる素養のある筈はないのですから。

タジム

な、殺さねえでくれよ。

ラビナス

お前、名前はなんと言いますか。

タジム

タジム、

ラビナス

マサロの住人ですか。

タジム

違う、マサロなんかじゃない。俺はソマテの生まれだ。

ラビナス

大した違いはありません。サラガヤ人にあらずば人にあらずです。下賤のお前には何が起こったのかすら分からないのでしょうか。

タジム

(不安げに頷く)

ラビナス

ラクサーダはサラガヤのキンポウゲをマサロのニガヨモギが枯らすと言いました。キンポウゲはサマラ語のメディナ、つまりコンパーレ様のご令嬢の名と同じ。そしてニガヨモギは呪いの同義語。あの時ラクサーダは、邦司コンパーレ様の娘ごに呪いをかけたのです。

タジム

えっ、

ラビナス

ラクサーダは狂人ではありませんでしたが、私の知る限り、これまであのよ

うな言葉を吐いた事はありませんでした。それが、邦司の最もご寵愛深き娘ごに、呪いの言葉を残したのです。驚きました。しかし、ラクサーダ以上に我々を驚かせたのはお前です。下賤の盗人が、サマラ語で「かけられし呪いは卑しきこの身が代つて受けましょう。永らえる命あるならば全てを美しき花のために」と言ったのですから。かけられた呪いを代つて受けると。ましてやそれが経典の逸話から取った言葉とあつては、あの状況でお前を処刑することなど出来なかつたのです。これで分かりましたか、お前が命を永らえた理由が(タジム、何度も頷く)……たとえ数日とは言え、ですが。

タジム

へっ、

ラビナス

(僧・ジユテに)連れていきなさい。

タジム

な、助けてくれよ、殺さないでくれよ(僧・オンドルとジユテに両脇を抱えられ上手に引き摺られて行く)助けてくれよ。

(二人になったラビナス、経典を開く)

ラビナス

ラクサーダは己の命が尽きようとしている時にあのような下郎を助けた。救う価値など何処にもない、クズの命を……理に適う説明など探しても無駄かも知れません。死を目の前にして、平常心を保てる者の

ある筈もなし。

僧達の声
本殿の方に回ったぞ、

僧達の声
あそこだ、柱の影に隠れておる、

僧達の声
裏庭じゃ、裏庭に逃げ込みおった。

ラビナス
（上手に向かい）いかがいたしました。

僧・オンドル
（上手より登場）申し訳ありません。あの下郎め、われらの手を振りほ
どき、逃げ出してございます。

ラビナス
何と、逃げましたか。

僧・オンドル
ご安心ください。裏庭に逃げ込みましたので、袋の鼠でございます。
すぐに捕らえましてハンガス様の元に連れて行きます。騙りと判りま
した以上、ここに留め置く理由もございませんゆえ。

ラビナス
それには及びません。あの男は私がコンパレー様の元に直接連れてい
きます。午後には出ますので用意をしておいてください。

僧・オンドル
かしこまりました。

僧・ジユテ
（上手より登場）無事取り押えましてございます。

ラビナス
そうですか。

僧・オンドル
縛り上げて厩にでも転がしておきましょうか。

ラビナス
そうですね……いや、僧衣に着替えさせ、控えの間に待たせておきなさい。

僧・オンドル
僧衣に、でございますか。

ラビナス
（頷く）

僧・オンドル
かしこまりました。（僧・ジユテと共に、上手に退場）

僧・ムアティー
（下手より登場）おそれながら、ラビナス様、コンパーレ様がお見えでございます。

ラビナス
コンパーレ様が、

僧・ムアティー　ハンガス様もご一緒に。

ラビナス　何ですと、

コンパーレ　（コンパーレ、下手よりハンガスを連れて登場）変わりは無いかラビナス。

ラビナス　これは、コンパーレ様。

コンパーレ　（跪こうとするラビナスに）ああ、構わん。そのまま、そのまま。

ラビナス　コンパーレ様、せめてお知らせいただければ、お迎えに上がりましたものを。

コンパーレ　坊主の抹香臭い迎えなど何が嬉しいものか。

ラビナス　あまりに突然の事とて、このラビナス肝を冷やしてございます。

ハンガス　不意を衝かれて慌てるのは我ら世俗の者。祭司長ともあろうお方には無縁の事と思えますが。

ラビナス　（ハンガスに）坊主とて主をもてなす用意くらいはしたいものです。

コンパーレ

話は聞いたぞラビナス。ラクサーダめ、メデイナに呪いの言葉を残しておったとな。

ラビナス

はい、私めも驚きましてございます。我々に仇なす咎人とは言え、ラクサーダはこれまであのような言葉を吐いたことは一度もございませんでした。

コンパーレ

復活の予言は予想しておったがのう。

ラビナス

なにしろ己が縄打たれる時にすら、マサロ人に力づくの抵抗はするなと、説いた男でございませうから。

ハンガス

またぞろさような事を。あの男は今際の際に本性を現しただけの事でございませうよ。

コンパーレ

そうかも知れんな。

ハンガス

それよりラビナス様、お気を付けにならないと、近頃私の部下の中にはラビナス様はサラガヤの経典より、ラクサーダの言葉を学ぶ事に熱心なのだと申す者もおります。

ラビナス　　ハンガス殿、コンパーレ様のご前です。お戯れが過ぎましようぞ。

にらみ合うハンガスとラビナス。

コンパーレ　　二人ともやめんか。

二人　　……。

コンパーレ　　そんな事よりラビナス、呪いを代って受けると言ったその男、どこにおる。調べは付いたのであろうな。經典の逸話を諳んじるとは、一体何者じゃ。

ラビナス　　はい、それが、ソマテの住人でございまして、

コンパーレ　　何、ソマテ人。ソマテ人がサマラ語を話したと申すか。

ラビナス　　はい、何はともあれ、もし、お目通りをお許し頂けますれば、今ここに連れてまいります。

コンパーレ　　無論だ。そのためにワシは今日ここに来たのだ。早く呼べ。

ラビナス　　それでは、(僧・ムアティーに)かの者、控えの間にいます。ここへ。

僧・ムアティー かしこまりました。(上手へ退場)

ハンガス

ソマテといえはマサロに並ぶ非人の血筋。そのソマテ人がサマラ語を使ったとは、奇怪な話。ラビナス様がどのようなお調べをなさったのか、興味深いところでございますな。

ラビナス

経典を渡し、これを読むようにと命じただけでございます。

コンパーレ

なるほど。そして、その者は経典を読んだのだな。

ラビナス

その者は、

僧・ムアティー

連れてまいりました。(僧・オンドル、僧・ムアティーに連れられて、タジム登場。うなだれている)

ラビナス

ソマテ人、タジムでございます。(僧・オンドル、僧・ムアティーに目配せをし、僧達、タジムを掴んだ手を放す)

コンパーレ

苦しゅうない。面を上げい。

タジム

……(怯えきっている)

ラビナス

この者、なるほど下賤なるソマテの生まれではございますが、幼き頃より神仏に関心を持ち、サラガヤの寺院に足繁く通った由にございます。

タジム

：：（え？）

コンパーレ

それは殊勝なる心掛けじゃ。

ラビナス

参拝の折、不幸にも盗人と間違われ、大した調べも受けずに刑場に引き出されたのですが、

ハンガス

お待ちください。盗人でないと申されるならば、その根拠をお伺いしたい。

ラビナス

ハンガス殿もこの男のサマラ語はお聞きになった筈です。独学で覚えたといいその知識から見てもこの者の潔白は明らかでございます。心卑しき盗人がそのような事をするかどうかお考え下さい。

ハンガス

しかし、

ラビナス

それにこの者には、永らえてメディナ様に降りかかるあらゆる災いを

代って受ける役目がございます。

コンパーレ

その通りじゃ。

ラビナス

コンパーレ様、お許しが頂ければ、この者を私の元に置き、僧侶として学ばせたいと願いますが、いかがでございますか。

コンパーレ

それは良い考えじゃ。是非そう致せ。タジムと申したな、これからは心おきなく、神の教えを学ぶが良い。いずれ娘のメデイナにも目通りを許すが、あれはワシの命じゃ。お前が自ら受けた役目、くれぐれも忘れるでないぞ。

照明F〇して驚いているタジムの顔だけがスポット抜きで残る。

タジム

(独白)何だか、訳の分からない事になっちまったけど……とにかく俺はまだ生きてる。(笑)俺は、まだ生きてる(下卑た笑い)生きてるぞ。

第三幕

数日後のサラガヤの聖堂。中央にタジム、下手に僧・ジュテとオンドルが経典を手に立っている。

僧・オンドル

それでは、最高神サマシタールの経典はいくつの書物より成り立ちし

か、お答え下さい。

タジム

いくつの書物って、神様の本は一つじゃないのか。

僧・オンドル

サマシタールの経典は十二の書からなりて、各々が七つの章に分かれる。

僧・ジユテ

それでは、火の神マギの訓戒ほどの書物なるやを、お答えください。

タジム

じゃあその、十二のうちの一つ事だよな……さ、三番目、

僧・ジユテ

第一の書、第六章です。

僧・オンドル

昨日学んだばかりではありませんか。

タジム

……。

僧・ジユテ

タジム殿は、お疲れのご様子。本日はこれまでといたしましょう。

僧・オンドル

そのようにいたしましたしょう。

僧・ジユテ

それにしても、我々凡僧にはラビナス様のご真意は時に図りかねます。

ろ。俺にはちつとも分からねえんだが、ちゃんと読めたら面白れえの
かな。

モキ 私には、まだ経典を学ぶ事は許されておりませんから。

タジム どういうことだよ。あんたも坊さんなんだろう。

モキ 末席を汚しているだけの身です。

タジム 分かり易く話してくれよ。

モキ ここでは普通、経典を学ぶ時間が与えられるのは古参の僧だけです。

そうなる前に三年以上の下働きをしなければなりません。

タジム 三年、

モキ それに、タジム様がお持ちのその経典は、一般信徒の持つそれと違っ

て高貴な方だけがお持ちになるもの。私など触れる事すら許されては
おりません。

タジム ……そつか。じゃあ、あんたここに来てまだ三年経ってないんだ。

モキ 五年目が過ぎました。

タジム 分からねえな。

モキ 私の生家は良民ではなく、下人に等しき農奴です。

タジム 農奴って、あんた、サラガヤの生まれだろ。

モキ もちろんそうです。しかし、サラガヤ人にも身分の違いはありません。

タジム へえー、そうか。驚いたな。このアスカリナで見るサラガヤの人間はみんな兵隊か坊さんだ。俺達はどっちに出会っても頭を地べたに擦りつける。それなのに、サラガヤ人にも下人や農奴がいるとはな。

モキ ……(睨みつける)

タジム 悪く取らないでくれよ。なんか親しみを感じるって事だよ。仲間に出会ったみたいでさ。だって、俺なんか、

モキ タジム様、これが数日前なら今のあなたの言葉は私にとって屈辱です。しかし、今私はあなたのお世話をするようにとラビナス様に命じられています。ですから、あなたの方が私より神に近い人だと信じます。

何よりそれはラビナス様がお決めになった事ですから。しかしソマテ人のあなたが経典を学ぶ事に、我慢のならない人たちもいます。その事はお忘れにならない方がよろしいでしょう。

タジム

…分かったよ。

モキ

申し訳ございません。

タジム

あんた、正直だな。な、もし知ってたら教えてくれないか。あのラビナス様はなぜ俺を助けたんだ。ただの酔狂で俺を坊主にしようって訳じゃないだろ。

モキ

私には、分かりません。

タジム

そっか、そうだよな。

モキ

申し訳ございません。

タジム

いや、いいんだ。

モキ

失礼いたします。(上手に向かおうとする)

タジム

待つてくれ(モキ、立ち止まる)……あのな、あんたが触る事も許されていらないような大事な物を、下郎の俺が、粗末にして、さぞかし腹が立っただろうな。すまなかつた。俺なんかがさ、神様の事を勉強したつて、豚に真珠だよ。でも、心配しねえでくれ。どうせ俺はここに長居しようとは思っちゃいねえんだ。頃合いを見て出て行くつもりだ。だからそれまでの辛抱だと思つて付き合つてくれよ。ほら、あんた、いい人みたいだからさ。

モキ

タジム様、ここを出ると仰られても、それは叶わぬ事です。

タジム

叶わぬつて、どうしてだい。

モキ

ラビナス様が、いえ、誰よりコンパーレ様がお許しにならないでしょう。もし逃げて、すぐに追つ手をかけられません。

タジム

そんな事は百も承知だ。あんたも知つてるだろ、俺はもともと盗人だよ。生まれた時から追いかけられつばなしだ。逃げる事には慣れてるさ。確かにこの間はドジを踏んじまったが、あれは油断しちまったんだ。そう、生まれて初めて捕まった。けどもう二度と捕まりやしねえ。

モキ

タジム様、一介の盗人が小働きをして逃げるのではありません。邦司

に追われる時は追っ手の数は数百人。賞金を掛けられ国中にふれが回ります。逃げられる筈はないのです。

タジム

：俺が賞金首になるっていうのか。

モキ

そうです。捕まってもラクサーダの予言の事がありますから殺される事は無いでしょうが、鎖につながれて一生を牢の中で送る事になります。ラビナス様のお計らいが無かったら、もともとそうなっていた事の事ですから。

タジム

：だから、おとなしくしているって事か。

モキ

聞きかじった話から、私なりに推測した事を申し上げました。お気を悪くなさらないでください。

タジム

：多分、あんたの言う通りだよ。ありがとう。

モキ

：(出て行くこうとする)

タジム

名前、聞いてなかったよな。

モキ

モキと、言います。

タジム どうやら、長い付き合いになりそうだ。よろしく頼むよ。

タジム、上手に退場するモキを目線で見送った後、テーブルに歩み寄る。下手より僧衣を着てフードを目深に被ったカナとシャツポ登場。タジム、二人をチラリと見るが正体には気づかない。テーブルの果物を手に取り食べようとする。

カナ 經典の勉強が終わってないだろ。それが終わるまで、飯はお預けだ。

シャツポ そうだ、お預けだ。

タジム (声で気づき)カナ、シャツポ、

シャツポ タジムのドジ野郎、

タジム (指を口に、上手の様子を伺い、喜)くっそー、二人とも何しに来たんだよ。

カナ あんたの泣きっ面を拝みに来たのさ。

シャツポ そうだよ、も一度見たたくてさ(刑場でのタジムの真似をして)助けてくれ、死にたくね。

タジム シヤツポ、この野郎(シヤツポに飛び掛る)

シヤツポ 助けてくれ、死にたくない、

カナ 死にたくない、

タジム 馬鹿にしやがって、

三人 (大笑い)

タジム カナ、(僧衣を)お前がこさえたのか。

カナ あたい以外に誰が作れるのさ。

タジム 本物と見分けがつかねえ。

シヤツポ 材料をくすねて来たのはオイラだぜ。

カナ (フードを被り)こうやってたら、誰も気づかなかつた。

タジム まったく器用なもんだ。

シャツポ

カナは、裁縫の上手い嫁さんを貰ったらタジムだって幸せになれるって。

カナ

(殴る真似) シャツポ、

シャツポ

助けてくれ、死にたくねえ、

タジム

(笑) もうやめろって、

カナ

それにしても、タジムは悪運が強いよ。

タジム

そう簡単に死んでたまるかってな。

カナ

でも、坊さんになる修行をしているって聞いた時は絶対嘘だと思った。

タジム

俺だって信じられねえさ。

シャツポ

今度こそタジムは助からないって思ったのに。

タジム

まるで助からなけりや良かったみてえだな。

カナ
マサロの連中は、何で預言者様が死んで、あんな盗人が助かるんだって言ってるよ。

シャツポ
あいつらは、本気でラクサーダが生き返るって信じてるんだ。

タジム
……。

カナ
人間死んじゃったらおしまいさ。

タジム
お前ら、腹へってないか。

シャツポ
いつだってぺこぺこさ。

タジム
(テーブルの上の食物を)全部食っていいぞ。

シャツポ
スゲー、(両手に挿んで噛り付く)ウマー、

タジム
カナ、お前も食べよ。

カナ
うん。ねえタジム、いつここを出るんだい。

タジム
さっきの話、聞いてたんだろ。ここを出るのはそう簡単じゃなさそう

だ。

カナ　じゃあ、ずっとここにいて本当に坊さんになるのかい。

シャツポ　こんな美味しいものを毎日食えるんだったら、坊さんも悪くないよ。

タジム　（シャツポに）そうだな、修行して偉い坊主になって、毎日美味しいものを食うってのも悪くないな。

カナ　本気かい、タジム。

タジム　そんな訳ねえだろ。おれが坊主になれるかよ。

カナ　安心した。

タジム　ただな、ここを出たらもうアスカリナだけじゃなくてサラガヤの領地には住めなくなる。だから、逃げるとしたらホラズム辺りまでは行かないとな。

カナ　ホラズム、西の蛮人が住んでるってあの国かい。

タジム　ああ。お前ら、ついてくるか。

カナ
当たり前だろ。

シャツポ
行つてやるよ。

タジム
よし。だったら作戦だ。まず、行きがけの駄賃にこの寺で一働きする。ここには高そうな細工物がごろごろしてるからな。目ぼしい物をがっぽり頂いてずらかるんだ。

カナ
タジム、

タジム
分かつてるよ。サラガヤの寺をやるのは気が進まないつてんだろ。

カナ
そうだよ。この前もあたいは反対したけど、やっぱり失敗したじゃないか。

シャツポ
そう言えば、そうだよな。

タジム
あの時は、確かに甘く見えた。だからドジった。だけど頭使つてちゃんと準備すれば絶対に失敗なんかしねえ。現にお前達は昼間っからここに忍び込んで来てるじゃないか。

カナ
それは、この衣装のおかげさ。

タジム
だろ、頭を使って出来たんだ。

シャツポ
それもそうだ。

タジム
それに、ホラズムは遠い、逃げるには先立つものが必要だ。

カナ
だけど、

タジム
サラガヤの領地を出るには十日はかかる。すぐに気づかれて追っ手をかけられたら逃げられない。だから紀元節を待つんだ。

シャツポ
紀元節？

カナ
サラガヤの祭りね。

タジム
ラビナスってここの親分と側近たちは本国でやる札拜に出かけて、四五日前からいなくなるらしい。今からだと二つ目の新月だ。

シャツポ
随分先だな。

タジム

準備するにはちようどいいさ。お前らは旅の支度をしてくれ。盗んだ品物を運ぶには駱駝も必要だ。俺はこの寺のどこに何があるかじっくり調べておくよ。

カナ

時々、忍び込んで来てもいいかい。

タジム

危ないって言ってるのはお前だろ。

カナ

だけど、

シャツポ

(まだ食べながら)タジム、乙女心を分かってやりなよ。

カナ

シャツポ、

タジム

分かった。段取りの進み具合の確認を、今度の新月の日、今頃の時間に。坊主たちが飯を食い始めて中が手薄になったら本堂の裏手で俺が手を叩く。

カナ

壁越しで、聞こえるかな。

シャツポ

(首にかけていた笛を出し)これを使うといいよ。

タジム
(受け取る)笛か。

シャツポ
虫の音とそっくりで怪しまれない。音は小さいけど結構遠くまで響くんだ。

タジム
分かった(首にかける)

僧・ジュテ(声)
しかしながら、タジム殿には何かを学ぶという気概も意欲もまるで見受けられません。

僧・オンドル(声)
さよう。私どもがいくら噛み砕いて教えましても、

タジムが目配せをして、カナとシャツポ下手に退場。

ラビナス
進歩がないという事ですな。(僧・ジュテ、オンドルを従えて上手より登場)つまり、あなた方は、私の期待に応えられないという事ですか。

僧・ジュテ
いえその、やはり口伝では、難し過ぎるのやも知れませんが。

僧・オンドル
さよう、明日からは、文字をお教え致しますよう。

ラビナス
もうよろしい。下がっていなさい。

僧・ジュテ
申し訳ございません。

僧・オンドル
失礼致します。(僧達、下手に退場)

ラビナス
(タジムをチラリと見た後、正面を向き、静かに) つくづく嫌気がさしました。

タジム
へっ、

ラビナス
何か一つくらい取り得があつて良さそうなものですが、何も無い。

タジム
…あの、

ラビナス
我慢にも、限界というものがあります。

タジム
これからは、ちゃんと勉強して、その、

ラビナス
(笑)お前の事ではありません。マサロの地、そしてこのアスカリナの街の事を言っているのです。

タジム
あ、そっか。

ラビナス

私はここに来てもう六年になりますが、この地方にはうんざりです。住んでいる者たちは皆愚かで頑固。街は乾燥しきってそこから中埃だらけ。部屋の中にまで砂が入ってくる。ここは人の住む所ではありません。

タジム

その通りですね。まったく住んでいる奴らの気が知れない。

ラビナス

この地は雨だけでなく、あらゆる天の恵みに見離されています。

タジム

仰る通りです。

ラビナス

昔、ここに人が住むようになった唯一の理由があります。それは何だと思えますか。

タジム

え、何でしょう。

ラビナス

井戸です。

タジム

あ、そうか。

ラビナス

恵まれた水量ではありませんが、周りを囲む荒涼とした砂地には無い

貴重な水です。しかしこの地方には雨は殆ど降らない。タジム、お前は地下の水がどこから来るのか知っていますか。

タジム
：：どこでしょう。

ラビナス
遙か離れたサラガヤ本国です。サラガヤには美しい緑の大地があります。神々に祝福された数々の山があります。そこに降った雨が地下の水脈となって、わずかばかりの水をこの地に運んでいるのです。

タジム
へえ、面白れえ話だ。じゃあ俺達が飲んでるのはサラガヤの水なんですね。

ラビナス
その通りです。そして、そこにも真理が隠されている。雨は決してマサロやソマテの地に降るのではなく、サラガヤに降るのです。神の祝福はサラガヤに降り注ぎ、サラガヤを通してマサロやソマテにもその幾分かをもたらされる。それは理屈ではなく、神がそうお決めになった事なのです。更に、それはそのまま、国として種族としてのサラガヤとマサロのあるべき姿なのです。誰にも変えることは出来ません。
なるほど。

ラビナス
あのラクサーダは、人には生まれつきの貴賤など無いと説きました。

サラガヤ人もマサロ人も同じだと。暴言です。それではまるで「全ての生き物は鳥である」と言うのと同じではありませんか。

タジム
鳥？

ラビナス
豚に向かって「お前にも空を飛ぶことを許そう、お前は今日から鳥なのだ」と言っても、何の意味がありますか。豚に空が飛べますか。

タジム
豚は飛ばねえ。

ラビナス
その通り。神が定め賜うた分をわかまえる事が大切です。

タジム
なるほど、ラビナス様の話は分かり易い。

ラビナス
タジム、

タジム
は、はい。

ラビナス
お前は、分をわかまえていますか。

タジム
当たり前ですよ。ラビナス様の言う事は、俺にとっては神様の言葉だ。

ラビナス

無理をしなくても良い。

タジム

無理なんかしてねえ。俺は本当にラビナス様の手足になって、何でもします。

ラビナス

私は、お前にそれほど多くを期待している訳ではありません。

タジム

はい。

ラビナス

ただ、お前に出来る事で協力して欲しいのです。そうすれば私はお前に、ここでの安泰な暮らしを約束しましょう。

タジム

有難てえ話だ。

ラビナス

良いのか。お前はあの刑場で確かに神からの啓示を受け、サマラ語の經典の言葉が心に湧いて出たのです。あの時の事は、誰に聞かれてもそのように答えるのです。

タジム

はい。

ラビナス

もしサマラ語を話してみると言う者がいたら、神の啓示がなければそれは出来ないと言えなさい。

タジム

はい。今は、そうします。でも俺はラビナス様のご恩に報いるように一生懸命に勉強して、いつか本当に立派な坊さんになってサマヲ語だつて、

ラビナス

タジム、分をわきまえろと言っているではありませんか。お前はとも僧侶になれるような器ではありません。

タジム

へっ？

ラビナス

僧侶になるには、高貴なものに対する畏敬の念と、真理を渴望するひた向きさがが必要です。しかしお前は粗野で品がなく、不正直で、何より心根が芯から卑しい。そうやって神妙な顔で私の話を聞きながらも、腹の内では赤い舌をぺろりと出してほくそえんでいる。

タジム

そんな事は、

ラビナス

それでいいのです。

タジム

え、

ラビナス

お前のような者が真理を求めて何になりますか。本物の僧侶ではなく、

むしろそれらしく見える偽りの僧侶になりなさい。私は、あの刑場でお前が見せた芝居と、その卑しい生まれ育ちを見込んで助けたのです。

タジム

ラビナス様、

ラビナス

ラクサーダから教えられたばかりのサマラ語を、お前はあの時あたかも神の啓示を受け、心の内から搾り出すかのように口にしました。不正直で厚かましいお前の生きることへの執着です。しかしそれは見事でした。あの瞬間はこの私ですら不覚にも騙されてしまったのですから。

タジム

：：偽りの僧侶ってのは、どういうことですか。

ラビナス

中途半端な知識をひけらかすとほころびが出ます。お前自身は何の知識も持っていないが、神がお前を通して語られるという事にするのです。都合の悪い時は神からの啓示が無いと言えば良い。お前が語るべき言葉は事前に私が用意しましょう。お前はそれを自分の言葉のように話せばよいのです。

タジム

俺に一体何をしろってんですか。

ラビナス

詳しい事はいずれ話しましょう。ただ、偶然ではあってもお前は二つ

の良い条件を兼ね備えています。一つは、お前の命は邦司によって守られているという事。なにしろコンパーレ様はその娘ごメディナ様を溺愛しておられる。もう一つは、お前がソマテの生まれであるという事です。ソマテはマサロに隣接する狭い地域に過ぎませんが、アスカリナの東に位置し、小高い山もあるのです：分かりますか。

タジム

：東の、山より、

ラビナス

思った通り、飲み込みは早いようですね。さしあたりその下品な言葉使だけは早く直しなさい。蘇った聖者にはふさわしくありません。

(暗転)